

# 『鈴鹿本今昔物語集』巻29の研究（4）

—第26話～第40話—

田 口 和 夫

## Research on Volume 29 of “Suzukabon Konjaku Monogatari Shu”

— Stories 26-40 —

Kazuo Taguchi

本論文は、田口和夫教授を中心とした自主ゼミである、説話ゼミ（旧今昔ゼミ）の活動の報告である。『鈴鹿本今昔物語集』の影印を読みながら、従来の諸説を確認しつつ、鈴鹿本の字形・墨色・虫損などから、新たな問題点を発見・考察し、また解釈においても従来の説をすすめたところがある。

なお、本論は目録編を含め、『鈴鹿本今昔物語集』の第26話から第40話までを範囲としている。

This article is a report on the activity of the “Setsuwa” seminar in which Professor Taguchi is the leader. While reading the “Ei-in” of “Suzukabon Konjaku Monogatari Shu”, we checked historic interpretations and recent discoveries and considered the new points through the form of the characters, the color of the ink, and parts destroyed by insects. Also we looked into the current opinions about interpretation.

The article includes the contents and covers stories 26-40 of “Suzukabon Konjaku Monogatari Shu”.

はじめに

本稿は『言語と文化』第十六号（二七七話）、第十七号（八十五話）、第十八号（十六話―二十五話）に載せた『鈴鹿本今昔物語集』巻29の研究の続稿である。スペースを節約するために、前稿と同じく、各話の要約は省略した。記述の手順は前稿と同じく、問題部分についての鈴鹿本の所在（丁と表裏）と問題箇所（――を付す）を含む部分を挙げ、鈴鹿本と表記の形式を同じくする旧大系における所在を（ ）の中に記す。次に〔各説〕として参照資料の注のうち注目すべきものを挙げ、〔考説〕として考えたことを記す。なお本稿においてはスペース節約のため各説の引用は簡略化した。

本文編

日向守 殺書生語第廿六

○標題の「第廿六」は依然右に倒れる字形となる。前号に注目したものと同じ現象であり、追記と考え

る。以下の説話標題においても同じと考えられるものには傍線を施した。

鈴鹿本巻29・41丁裏 此モ彼モシテ給ハムニ事ハ  
(182頁3行)

〔考説〕 諸注「給ハムニ」で句点を打ち、意識する。熟さない表現だからであろう。「テ・ニ」は片仮名双行の左側の字で、これが無ければ「此モ彼モシ給ハム事ハ」となり、スムーズに理解できる。書写過程で誤りがあったのかもしれない。この後の「然気无シニテナム將行ケル」も熟さぬ表現であり、「然気无（さりげなく）シテナム」とありたい。

主殿頭源章家造罪語第廿七

鈴鹿本巻29・43丁裏 幼キ子ヲセ、ラカス様ニ我カ  
子我カ子ト云テ 〓ケレハ (184頁8行)

〔考説〕 諸注子供をあやす仕草であることは一致している。旧・新全集が巻28第33話の「シワ、

リ」と同様とするのは注目すべく、それを旧大系では本文「シソ、リ」として新撰字鏡の「ヒソ、リ」の「ソ、リ」と同義として「ヒルと同じく、穀類をミなどでふるうこと。茲は、その揺り動かす動作を幼児を抱き上げてあやすことに転じもちいたものであろう」とする。これは納得できる見解である。名義抄に竹冠に麗の字を「フルヒ、ヒソ、ル」と訓ずる例もある。結局、「シワ、リ」「シソ、リ」は「ヒソ、リ」の誤写とすべく、この空格には「ヒソ、リ」を想定すべきであろう。

住清水南辺乞食以女謀入人殺語第廿八

鈴鹿本卷29・44丁裏 (標題)

〔考説〕「住清水南辺乞食」は肉太太字、「謀入人殺」は小さくなるが上と一筆か。稲垣泰一氏とともに京都大学図書館貴重書庫に於て修復なった鈴鹿本を全帖一見した時の記録によ

れば、この太字部分は青墨で他とは異なる。「以女」は補入、「語第廿八」は前号で指摘した話番号の追記と同じと思われる。「以女」の補入も目録と同筆らしく、話番号追記と同時に考えられる。

鈴鹿本目録の標題は「第八」である。単純に「廿」を書き落としたものと判断できるが、このように誤るのは目録では標題に続けて話番号を書いていたためと考えられる。

鈴鹿本卷29・44丁裏 歩ナル女ノ糸浄気ニテ ヤカ

ニ着物ナトアル (185頁12行)

〔各説〕○旧・新全集「ナヨ(ヤカ)」○新大系「アテ(貴)」

〔考説〕新大系は「平安時代に「なよやか」の語形はない」とするが、日本国語大辞典に狭衣の用例を引く。「なよやか」とともに衣装に用いられる形容であり、全集説に従う。

なお、角川古語大辞典は「なよやか」を立項せず、「なよよか」の中に「なややか」（宇津保・楼上上）を引くので「ナヤヤカ」もあり得るか。

鈴鹿本卷29・45丁裏 夜モ深更ヌレハ（186頁13行）

〔考説〕諸翻刻は「ヌレハ」としているが、字形は「ス」である。このままでは「夜もふけむずれば」となるが「夜モ深更ヌレハ」とあるべき所であり、諸翻刻に従い「ヌ」と判断する。ここに限らず鈴鹿本における「ス・ヌ」の表記は紛らわしい。

鈴鹿本卷29・46丁表 謀寄セテハ寝スル際ニ（187頁5行）

〔各説〕○旧・新全集類聚名義抄を引いて「ふスル」と読む。○新大系「ふスル」と読むこともできなくはないが、「寝ヌル」の誤りであろう。

〔考説〕「ふス」は直近に「入テ臥ヌ」「云臥タルニ」とあるように「臥」を用いているので、新大系説に従う。前項に記したように「ス・ヌ」は紛らわしい。

女被乞句棄子逃語第廿九

鈴鹿本卷29・48丁裏 喘タキテ走ルヲ（190頁1行）

〔各説〕○旧大系は卷28第32の同例について諸辞書を引いて検討し「アヘタク」を「アヘク」と「スタク」の混淆によるものとするならば、後者に就くべきであるが、後考を俟つとする。○旧・新全集「あへたく」○新大系「すたきて」「喘」には「あへく」の読みが一般的であるが、この送仮名から判断してかく読む。」

〔考説〕旧大系の引く「スタキアヘグ」・「アヘギスタク」は後の用例ではあるが、「アヘグ」と「スタク」が同義に用いられることがあったことを証している。混淆とみるより「ス

タク」に「喘」字を当てたと見て、新大系に従う。後の第35話も同例。

上総守維時郎等打雙六被突殺語第三十

○標題は一筆と思われる。

鈴鹿本卷29・49丁裏 上ヨリ刀ヲ (191頁4行)

〔考説〕 諸注「ヨ」破損とするが、わずかに縦画が残る。

鈴鹿本卷29・49丁裏 被突殺スレハ (191頁7行)

〔考説〕 諸翻刻「ヌレハ」とする。そうあるべき所である。「ス」と「ヌ」が紛らわしい例である。

鈴鹿本卷29・49丁裏 聞ク人云謗ケルトナム (191頁11行)

〔考説〕 「謗」字、はじめ木偏を書き始めて、言偏とする。

鎮西人渡新羅値虎語第卅一

○標題「値虎語第卅一」は墨色が薄い。あるいは追記か。

陸奥国狗山狗昨殺大蛇語第卅二

鈴鹿本卷29・52丁表 不免サスシテ昨付タルヲ見レ

ハ大キサ六七寸許 (194頁7行)

〔考説〕 「テ」は「天」に見えるが、始め「モ」と書き「テ」に訂したもの。「大キサ」は本来「太サ」とあるべきか。

鈴鹿本卷29・52丁裏 思ヒ静テ (194頁16行)

〔各説〕 ○新大系は「底本「テ」か。破損のため不分明」として、諸本の「ニテ」「メテ」とあるを引く。

〔考説〕 残画から見て、「テ」は確実。「静」字の右下にわずかに墨が見えるが、「メ」を置く程のスペースではなく、汚れと判断する。

肥後国鷲野殺蛇語第卅三

鈴鹿本卷29・52丁裏 榎ノ木ノ下枝ヨリ (195頁6行)

〔考説〕 旧・新全集、新大系「したえ」と読むが、「しづえ」または「したえだ (古本説話集64)」と読むべきであろう。

鈴鹿本卷29・52丁裏53丁表 縛ル様ニレハ (195頁11行)

〔考説〕 新大系は「該当する語は想定しがたいが、しめあげる動作をいうのであろう」とするが、旧・新全集は「ネヅ」の漢字表記を期した意識的欠字」としている。卷第十第十二話の「ネヂテ」の片仮名大字表記に徴すれば、それが妥当と言えるが、卷29第12話に「捻抜テ」とあり、諸翻刻「ねぢぬき」と訓ずる事によれば、「ネヅ」の漢字表記は卷29では可能とも言える。あるいは「シム (絞む)」も想定できるか。

鈴鹿本卷29・53丁表 三切レニ昨切テ鬻ヲ以テ昨ツ

(196頁2・3行)

〔考説〕 「昨ツ」は諸翻刻「昨ツ、」とする。虫損で見えないが、旧大系も踊り字を置くので、見えたものであろう。「三切レ」は、三度「昨切」つているので、「四切レ」になる筈である。頭部を別にして、胴・尾部を「三切レ」としたか。

民部卿忠文鷹知本主語第卅四

鈴鹿本卷29・53丁裏 其時ニ 卿ノ重明ノ親王

(196頁14行)

〔考説〕 空格は諸注「意識的欠字」とし、「中務または式部」を想定することは一致する。卷27の第6話に「式部卿ノ宮」とあることも注される。「中務または式部」のいずれかに迷って空格としたと見るよりも、今昔編者は卷27第6話のそれと本話の「重明親王」が同一人物であることに気付かなかったも

のと考える方が適当であろう。今野達氏が指摘された貴族・官人としての知識欠如の例と見るのである。

鈴鹿本卷29・54丁表 木幡ノ刃ニテ試ム(197頁7行)

〔考説〕旧大系、旧・新全集は「ト」を破損欠字とし、新大系は「ムト」を破損とする。修復により「ム」は見える。「ト」は大きい虫損で見えない。なお、攷證今昔物語集はここを「ムト」とする。

鈴鹿本卷29・54丁裏 此ノ鷹ヲ(197頁9行)

〔考説〕旧大系「底本、破損のため定かではないが、かく判じた」として以来、諸注同趣。修復後「此」の左右の残画が見える。なお、攷證今昔物語集はここを「此ノ」とする。

鈴鹿本卷29・54丁裏 故ヲ思ヒ専ニ親カラム人ノ為

二八(197頁13行)

〔各説〕○旧大系「フルキとよんで故旧の意に取る

説もあるが、常套の結語(中略)などの例よりすれば、なお、ユエとよみ、這般の事情を考えての意と取るべきであろう」○旧全集「これらの事情を考えて」○新大系「事情をわきまえて」

〔考説〕諸注、旧大系の説に従っているが、鷹の例も人に言及する場合も「親しく自分を知ってくれる者」の意で「本主」・「親カラム人」について述べていることからすれば、旧大系が捨てた「故旧」もあながち当らぬものでもない。ここは「旧知(ふるなじみ)」の意として「フルキ」説を採る。

鎮西猿打殺鷲為報恩与女語第卅五

鈴鹿本卷29・54丁裏 猿ノ居ルヲ去来行テ(198頁7

行)

〔考説〕諸翻刻「ゾ」としてここで終止するが、第一画と見える点は左から右に水平に引かれ

ており、「ヲ」と見た場合の第一画部分が虫損であることと併せて、ここは「ヲ」と認定する。なお、攷證今昔物語集はここを「ヲ」とする。

鈴鹿本卷29・55丁表 貝ノ口ニ差入レテ 〓 ケレバ

(198頁14行)

〔各説〕○旧・新全集「ネヂ」の漢字表記を期した意識的欠字。○新大系「漢字表記を期した欠字。「ネヂ（捻）」が想定されているが、「コジ（剥）」が妥当か。」

〔考説〕「ネヂ」は195頁11行の空格について見たように、漢字表記は不可能ではない。新大系の「コジ」は、卷19第19話に「大ナル金箸ヲ以テ、僧ノ口ニ入レテ剥レバ、口有ル限り開ヌ」の「剥」を「コヅ」と訓じているので、これも漢字表記可能である。どちらかと言えば、本話の場合は「コヂ」とする方が内容的には適当であり、編者が「剥」

の既出例に思い至らなかつたと見て、「コヂ」を採る。

鈴鹿本卷29・55丁表 其ノ貝ヲハ和ヲ引抜テ (198頁

15行)

〔考説〕貝の口に木を「コヂ」入れて、猿の手が抜けるようにしていたので、ここは「木ヲバ和ヲ引抜テ」となる筈である。後に続く「沙ニ搔埋テケリ」に意識が行ってしまつて「貝」としたものであろう。

鈴鹿本卷29・55丁裏 事吉気顔造テ 〓 居ケレハ (198頁17行)

〔考説〕諸注意意識的欠字とし、旧・新全集は猿の鳴き声である「カ、メキ」を想定する。新大系は想定なし。新潮古典集成は「頭を下げる動作、例えばウナヅキのごとき語ではないか。「うなづく」は卷5第3話に仮名書きの例がある」とする。「カ、メキ」は本



話における直前の仮名書き大字の例なので、直後のここを空格にするのは不都合であろう。新潮の想定に従い「ウナヅキ」を採る。

鈴鹿本卷29・55丁裏 然テ懲ヨ、和御許(199頁5行)

〔各説〕

○旧大系「(だから言わぬことではない)これです十分にお懲りになつたらよいでしょう。」○旧・新全集「直訳すれば、この失敗(猿に裏切られたこと)を悔いて再びこんなことをするまいと心に決めなさいな、」○新大系「これで思い知ったか。」

〔考説〕

能(黒塚)に「さて懲りよ、(鉄輪)に「さて懲りや、思ひ知れ」とある。新大系の注は先に行き過ぎか。旧大系のごとく「これで懲りるがいいよ」程度でよいだろう。なお、新潮は「然てこそよ」の本文によって、それが本来の表現とする説を述べているが、鈴鹿本に従うべきであり、成り立たない。

鈴鹿本卷29・56丁表 亦驚飛ノ来タルヲ(200頁1行)

〔各説〕

○新大系「底本、内閣林本「驚飛ノ来」に作り、底本は「飛」と「ノ」の間に反読符がある模様。反読符に従ってかく整理する。諸本は「驚飛来」に作る。」○新全集「底本「驚飛ノ」とあるが「ノ」の位置の誤とみる。」

〔考説〕

鈴鹿本修復によって、新大系が言及した反読符と見えたものは虫損痕と認定できる。結果は同じ「驚ノ飛」だが、新全集の説に従う。

鈴鹿本卷29・56丁裏 我レニ恩ヲ酬ムトテ(200頁2行)

〔考説〕

虫損のため「ヲ」の斜画しか残らないが、当然諸翻刻のごとく「ヲ」である。

於鈴鹿山蜂螫殺盗人語第卅六

○標題の話番号の「卅六」は他の書体と違つ

て小さく切れが悪い。

鈴鹿本卷29・58丁表 造り置テ他ノ事ニモ (202頁10行)

〔考説〕新大系は「他ノ」を破損とするが、修復されて見える。

蜂擬報蜘蛛怨語第卅七

鈴鹿本卷29・58丁裏 其ノ長ク引テ (203頁1行)

〔各説〕○旧大系「諸本欠字。六行以下の欠字も皆同一物に係る。前後の文脈からすると、「網」ではなく、蜘蛛の巣から、一本長く引いた筋で、その筋を伝って蜘蛛が自分の身を隠し、獲物を窺う、連絡用の一本の筋を指すものと思われる。」○旧・新大系「イ」の漢字表記を期した意識的欠字。くもの糸をさす」○新大系「クモの巣を構成する枠糸あるいは縦糸に相当することは文脈から知られる。」

〔考説〕諸説皆同様で、旧大系がもつとも詳しい。

クモの「網」も「糸」も同音の「イ」であるために「糸」の意味の「蜘蛛のイ」が漢

字表記できず、空格としたものであろう。

母牛突殺狼語第卅八

鈴鹿本卷29・60丁裏 狼ハ死テ皆テナム (205頁6行)

〔考説〕新大系が「漢字表記を期した欠字。すっかり潰れていたという意で、「ヒシゲ」が相当するか。」とするに従う。

鈴鹿本卷29・60丁裏 賢キ奴(カ)ツハ此ソ有ケル (205頁9行)

〔考説〕諸注「カ」をミセケチして「ツ」とする事同じ。初め「奴ガ」と画いて「奴ハ」と訂し、「カ」をミセケチするときに捨て仮名の「ツ」を補ったのであろう。誤写訂正のついでであつたと見る。

蛇見女陰発欲出穴当刀死語第

○標題話番号欠。新全集がもつとも詳しいので引く。「本話と次話の話番号、底本になし。また本巻総題にもこの二話の標題がないことから、総題の書かれた後で、この二話が追記されたと思われる、本集の成立に一つの問題を残す。なお、付言するならば、標題の「女陰」は本集では「開・門構えに也」(ツビ)がふつう。本文中に「下主」(「下衆」がふつう)の字を用いるのもここだけ、という点も指摘できる。」とする。これはこの二話の追記の時期がいつであったかという問題と関わりう。「まとめ」において言及することとする。

鈴鹿本巻29・61丁表 築垣ニ向テ蹲ニ居タリ (206頁 4行)

〔各説〕○旧大系「ウズクマリニ」と読み、巻28第10話の同例の注に「なお、名義抄の「踞」の訓「ウズキ」、建武四年本論語集解の「原壤夷(うするに)して」俟待(まつ)」に基き、

ウズキニとよむも一案。」とする。

〔考説〕旧・新全集「ウズクマリニ」と訓じ、「ニ」は「テ」の誤写かとする。新大系は巻28第10話の「テ」の異本注記があることを記して「うずくまりニ」とする。巻28第10話に同例がある以上、誤写とするのは適当ではない。ただし、「うずくまりニ居」は熟さない表現に見える。名義抄「踞」によって、旧大系の「うずるニ」を採用するのが適当であろう。

鈴鹿本巻29・61丁裏 手ヲ被捕テソ漸ツ、行ケル (206頁16行)

〔各説〕○旧大系は本文「漸ツ、」とし「底本かく作る。「漸々」をスコブルとよみ、同訓の「微」から推して、スコシツツとよむべきか。○旧・新全集・新大系は注なく「やうやくツツ」と読む。

〔考説〕「やうやくツ、」は熟さない表現で、旧大

系が「すこしづゝ」説を出すのは当然と言  
える。名義抄法上に「ス、ム」の訓がある  
ことから「すすみツ、」と読んでおく。

蛇見僧昼寝昨(門構えに牛)呑受煙死語第

鈴鹿本卷29・62丁表 吉ク寝入ニケル(207頁13行)

〔考説〕「寝」を書くが、鈴鹿本虫損でほとんど見  
えない。旧大系翻刻時はあつたものか。旧  
新全集は実践女子大本により補うとする。

鈴鹿本卷29・62丁裏 行ジツル時ニ蛇ノ否不堪テ

(207頁14行)

〔考説〕この辺り虫損甚だしく、旧大系翻刻時は存  
在したらしいが、旧・新全集は実践女子大  
本によって「行ジツル」を補い、新大系は  
「行シツ」「ニ」を諸本により補っている。

第十六号・十七号補訂

(1) 本文標題の話番号部分「語第一」「語第二」「語

第三」「語第四」「盗人語第五」「語第六」「語第七」  
に傍線を施す。

(2) 本文標題の話番号部分「強盗語第八」「被殺語  
第九」「語第十一」「告殺害人語第十三」「語第  
十四」「語第十五」に傍線を施す。

まとめ

先行の諸注を参照しながら読み進めたが、語の読  
みと解釈、空格の語の想定において、結果として異  
を立て、あるいは新説を出した場合がある。

「語第廿六」のような、ほぼ統一的な追記と考え  
られる現象については、前号において次の仮説を提  
出した。①まず目録の筆写が行われる。②次いで本  
文の筆写者が話番号のない標題と本文を書写する。  
③次いで目録の筆写者が話番号を追記する。

〔鈴鹿本における編集仮説〕

卷29に関しては以上の仮説で一応の解釈はでき  
ると思う。しかしながら、これが認められるとして、

なぜそのような面倒な過程が必要であったのかが問題となろう。

鈴鹿本の原本は未完成とは言え、一応の編集作業を経ているもので、それを単純に書写して行ったのが鈴鹿本であることは、池上洵一氏の考証「鈴鹿本を見つめる」において重複誤写の検討によって提唱され、認められるべき結論であると言える。しかし、そのような書写過程のみでは、巻29のような面倒な書写過程は不必要の筈である。また、巻29には目録にない二話が最後に置かれ、それらは話番号もない。私は鈴鹿本段階での編集作業があったことを仮説として提唱したい。鈴鹿本を書写する場合、一応単純な書写過程を経るが、未完成稿との認識があつて、さらなる編集を前提に置きながら書写していたために、話番号の統一的追記が行われたとみるのである。そしてさらに二話が追加された、この追加は鈴鹿本の第一次書写完成後に行われたと見るのである。新全集が指摘した新しい語彙表記も、このような編集作業による別時点の追記の故であつたと考える。こ

れが巻29の現状であるとしたい。

「トヤ」は「ト也」であること」

説話末の結語表現「トヤ」については、久しく疑問をいだいていた。「ヤ」の縦画があまりにも長すぎるのである。行末が詰まっている場合は「ヤ」に見えるが、一般的には「申」あるいは「也」の草体と見る方が自然であり、「申」にしては右に流れているので、「也」の草体と見るべきではないかと思つてきた。『鈴鹿本今昔物語集』の参考資料として引かれた伴信友の「十二卷奈良本批校之間事」に次の指摘がある。

○一章ノ終毎二也ノ字ヲ云々語リ伝ヘタルトヤト極艸ノ手ニ書リ 写本ニヤと書ルハソレヲ写セルモノナリ

これは納得の行く見解である。伴信友にならつて、私も従来の読みを変更し、「ト也」とここを読むこととしたい。

おわりに

本誌第十六号以来、三号に亘って連載してきた鈴鹿本卷29の研究も本号を以て完結となる。鈴鹿本を原本によってきちんと読みたいということは、修復なつた原本を京都大学図書館貴重書庫で一見して以来の念願であつた。国会図書館のマイクロフィルムは微細な点においては確認のしようがないものであつたからである。白黒影印とは言え、精密な印面で確認できる複製はありがたいものであつた。早速自主ゼミの素材として読みはじめ、ネット上のカラー版も参照しながら読み進めて来た。一人ではなかなかこのような作業はできない。その過程で、結構多くの発見があつた。私が発見し、院生の浦部誠君が代表で発表した大乘院紙背文書の記事（説話文学研究第37号に載せる）もそうであつたし、私自身が発表した古今著聞集説話と第十六欠話との関係（説話文学研究第41号に載せる）もそうであつた。私の都合により、午後のテニスが終わってからの時

間帯のゼミで、夕方から八時過ぎになることもしばしばであつたが、私にとっては教員生活晩年の至福の時間と言つてもよいものであつた。院生・学部生は年々に替わつたが、替らずに中心になつてくれた伊賀北斗君をねぎらいたい。

説話ゼミ参加者氏名 教授 田口和夫

伊賀北斗 浦部誠 川上由香理

近藤敏之 塩崎隆洋 山田麻美

姚偉麗 渡辺麻衣子